

健康文化

イエペスのギター

高田 健三

私が初めて“生”のクラシック音楽と出会ったのは、東京に住んでいた中学生の頃、新交響楽団(現NHK交響楽団の前身)が開いていた、青少年のためのコンサートを、日比谷公会堂で聴いたときである。我が国のオーケストラの育ての親とも言われるヨーゼフ・ローゼンシュトック指揮する大編成のオーケストラの華麗さと、圧倒的な迫力に魅せられて以来、クラシックの虜になった。しかし、その後は、戦争と、戦後の混乱期で、まともなオーケストラを聴くチャンスはほとんどなかった。そんな時代の中で、鮮やかな印象として残っているのは、名古屋市公会堂の広い舞台上で、ナルシソ・イエペスが聴かせてくれたアコースティックギターの芸術の世界である。

カリフォルニア大(バークレイ)にいた頃、学部のパーティーの余興等で聴いたウエスタンは、日本にいるときは、がさつで騒々しい音楽としか思わなかったが、大西部の中で生活してみると、そのメロディーに開拓時代の人達の喜怒哀楽を感じるのである。ツーソンにあるアリゾナ大学を訪れた折、暇を見て友人が案内してくれた大自然の中に、巨大なスガロカクタスの林立を見たとき、あるいはツームストーンの町に残る「OK牧場の決闘」跡地に立ったとき、耳に馴染むのは、ウエスタンの調べしかないのである。また、メキシコシティの下町のとあるレストランで聴いたマリアッチの音色には、民族に伝わる哀歓が感じ取れた。こんなことがきっかけで他のジャンルの音楽に興味を持つようになり、今やラテン、ウエスタン、シャンソン、ポップス等にも興味が広がって、TPOに応じて楽しんでいる。

数年前のことになるが、私立大で教えていた頃、ゼミの打ち上げコンパで、10人程の学生諸君とパブ風レストランに行ったときのことである。丁度、ブラジルから来日しているサンバの楽団が出演するとかで、学生達は盛り上がっていた。何でもありの無国籍料理とかが売り物の店であるが、サンバ楽団の出演にあやかって、ブラジル風焼肉のシュラスコが特別メニューとして加えられているとかで、皆大喜びであった。太くて長い鉄串に串刺しにして焼かれた牛肉の塊を、そのままの形で客席を廻りながら、大きなナイフで削ぎ切りにしてサ

ービスするのは、なかなか野性味があつていやが上にも雰囲気盛り上げていた。その他素性のはっきりしない料理が次々出てきて、それを頬張り、ビールを呷りながらわいわい喋っていると、突然、凄まじく大きな声がレストラン中に鳴り響いた。それはサンバの開演を告げるスピーカーからの声であった。気がつくやうに、ホールの方の壁際に臨時の舞台がしつらえてあつて、フットライトがつくと同時に7～8名の楽団員が登場した。全員、独特の民族衣装を身に纏い、1人ずつの紹介が終わるといよいよサンバの始まりである。

このジャンルの音楽をライブで聞くのは初めてなので、私自身も少なからず興味を持って待っていた。ところがである。演奏が始まったとたん、鼓膜をつんざくばかりの大音響が耳に飛び込んできたのである。アンプを通したスピーカーからの音である。結構な広さのレストランであつたが、部屋中に充満して圧縮された音が襲いかかって来るようにさえ思えた。ビヤホールの余興なので気楽に行きたいところなのに、思わず箸を持つ手が固まってしまった。ところが学生諸君は大音響の4分の2拍子にむしろ感情を揺さぶられるような顔付きになってきた。こんな状況下ではテーブルの会話など全く出来そうにないように思えて、学生諸君の顔を見ると、そんな中でも平気で話し合っているのである。私の耳には音にかき消されて、彼らの声が全く聞き取れない。君達はお互いの会話が聞こえているのかと、隣席の学生の耳許に口を寄せて聞くと、やっとの思いで拾った彼の返事は、聞こえますよとけろりとしている。一体彼らの聴覚はどうなっているのかと思った。私は時々耳を押さえなければならぬほどにがんと頭のとっぺんにまでひびくのだから、彼らの耳にも影響がないはずはない。難聴にならないかと思つた程である。

私の娘が高校生の頃、グループサウンズに凝つて、よくコンサートに通つていたやうであつたが、エレキギターなどアンプで増幅され、電子的にエコーが強調された大音響に長時間晒されるらしく、翌日は耳が聞こえなくなるやうな状態を覚えている。バンドマンでさえ難聴の人がいるといわれる程である。一時的な難聴というものらしいが、ウォークマンといったやうなステレオ・カセット・テープレコーダーをポケットに入れ、音量を上げて地下鉄の中や、歩きながらイヤホンで音楽を聞いている人は慢性難聴になる可能性があるやうにさえいわれている。

あるパーティーの席のことである。食事の後にシャンソンのライブが予定されてた。おいしい食事の後の余韻を楽しむには、なかなかの気配りであると期待を持って開演を待っていた。ところが始まったとたん、アンプを通した大音響には面食らってしまった。本来、シャンソンは人の心に語りかけるやう

に歌うのが真骨頂だと思っていた私には、興醒めもいいところであった。

そもそも、ライブコンサートなるものは、その字の通り“生の音”を聞くものであって、アンプで増幅したり、電子的エコーをかけたりののは、ハード・ロックならともかくも、こういうコンサートの場合は邪道ではないかと私は思っていた。しかし考えてみれば、アンプを使う使わないにかかわらず、ライブは“実演”のことなのであって、ライブを“アコースティック”と思っていた私が浅はかなのであった。もちろん、初めからエレキ用に作られる音楽のジャンルがあって当然であるが、それ向けのライブハウスや、何千人もの聴衆相手の、ドームや野外ステージのコンサート向けであって、レストランやホテルのホールで同じスタイルをとることはないと思う。家内はアンプを通した大音響に晒されると、決まったように気分が悪くなる。といて大編成のオーケストラの演奏会では、どんな大音響であっても、気分が悪くなるどころか、ある種の感動を伴って楽しめるのである。アンプで増幅された音と、アコースティックな音とが、物理的にどう違うのか私には分からないが、脳に与える生理的刺激に違いがあることは間違いなさそうである。

本財団の理事であった故若栗尚氏が、本誌に連載しておられた「音の世界」は実に興味津々で、毎号楽しませていただいていた。それによると大音量の音が、目まいや耳鳴りを引き起こすことがあり、バンドマンの中には難聴の人もいる一方、それを騒音に感じない人もいるらしい。また、騒音も場合によっては必要なことや、パーティー会場などでざわめきの中から、自分に必要な声だけを抽出して聞くことも出来るということである。それで思い出されることがある。戦前、東京に住んでいた頃、他の中学校と合同で、御殿場にある陸軍演習場で、3泊4日の軍事教練なるものがあった。ほとんどが極限状態を想定しての演習ばかりで、辛い思い出しか残っていない。最終日、“暁の総攻撃”でクライマックスを迎える。突撃の前に、一斉射撃で小銃、機関銃を撃ちまくり(もちろん空砲)、敵を威圧するのであるが、激しい銃声の轟音によるある種の興奮状態下でも、“怖い”軍事教官の声はよく聞き取れたものであった。

サンバの洪水の中での学生諸君の行動を見る限り、私には今や一斉射撃にも似た大音響も、彼らにはある種のBGMなのであろうか。必要なときには、その人の声を拾い上げるのこともなど何でもないことなのである。そこではたと気づいたことがある。講義室の私語による騒音問題は、大方の大学などで、教師の悩みの種である。数百人もの学生を相手の講義の場合、いきおい不届き者が私語することが多くなり、結構教室が騒々しくなるのである。真面目に聞いている学生には迷惑なことだと思っていたが、騒音に慣れた彼らにとっては、ざ

わめきなど何ほどのものでもなく、結構、教師の声を選択して聞いているのかもしれないのである。余計な気遣いをしていたかと思うと苦々しくもなる。

確かに大音響の効果は、強烈な刺激を与えることで、聞く者の心理状態をコントロールし、思う方向に誘導することにあるように思える。ハード・ロックなどのライブ・コンサートを映し出すテレビ画面の聴衆の表情には、ある種の陶酔状態が見て取れる。講義のとき、時折使用したビデオ教材には、かなりの音量のBGMが入っていて、解説の音声聞き難いのではないかと思ってもいたが、逆に学生の注意を引きつけるのに効果的であったとすれば皮肉なことである。カラオケの好きな人は結構多いが、マイクを握って歌うとき、アンプのボリュームを上げ、エコーを効かせると、“普通の人”は力量以上に、“下手な人”でもそれなりに“歌える”のは、大音響と、電子的に作られたエコーのなせる心理的効果なのである。

いつの頃から大音響の世界が広がったのか定かではないが、映画のスクリーンがワイドなシネマスコープ化すると同時に、広い画面に対応して、立体音響効果を出すため、複数のスピーカーを使い始めた頃ではないかと思う。私の記憶では、**The Robe**(聖衣)というアメリカ映画がそうであったように思われる。音源は前方からだけであった従来のものと異なり、劇場の測方、観客の後方にも設置されていて、後方から疾走してくる騎馬の音に振り向き、すさまじい雷鳴音に思わず首を竦めたものであった。近頃では、オーディオ器機にもサラウンドシステムを備えたものがあるようで、家庭でも演奏会の臨場感を味わえるという。我が家の居間にあるテレビ受像器にも、サラウンド機能がついていて、解説書によると、音声信号を少しずらすことにより演奏会場のような残響効果を出せるとある。しかし、家内はこの状態で聴くと気分が悪くなるというのでオフにして使っている。やはり、電氣的に作られた効果は、コンサートホールが持つ独特な音響とは微妙に違うのである。

21世紀は、ITとバイオテクノロジーの時代と位置づけられているが、技術の進化を追い求める余り、我々人間は、物事本来の“有り様”からますます遠ざけられていくように思える。せめて音楽ぐらいは、楽器固有の音が創り出すアコースティックな世界を楽しみたいものである。あの名画“禁じられた遊び”を名作たらしめたのは、全編に漂うイエペスのギターの調べの絶妙さで合ったとも言われている。近頃、アコースティックギターの注文が増えているという記事を目にした時、ふと屈み込むようにして弾く、40年前のイエペスの姿が目に見えた。

(名古屋大学名誉教授)